

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：37402

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20004

研究課題名（和文）1920～50年代における日本の探偵小説ジャンルの形成と展開に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Formation and Development of the Japanese Detective Fiction in the 1920s-1950s

研究代表者

井川 理（IGAWA, Osamu）

熊本学園大学・経済学部・講師

研究者番号：90909227

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1920年代から1950年代における日本の探偵小説ジャンルを、多様な言説から構成される動的な様態として捉え、その在り様を検討した。具体的には、1920～30年代における「探偵小説」の様相と、それが1950年代に「推理小説」という呼称に代替されていく過程を考察するため、新聞・雑誌を中心とするメディア言説の調査を行った。また、その変遷に重要な役割を果たした木々高太郎、仁木悦子、有馬頼義らの小説・批評実践を検討した。その結果、上記の呼称の推移は、ジャンルへのイメージが戦前から連続する「不健全」なものから「健全」なものへと変遷していったことと相関していたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、1920年代から1950年代における「探偵小説」から「推理小説」へというジャンル呼称の推移に注目し、個別の作家の小説・批評だけでなく活字メディアや映像メディア等も含めた調査・検討を通じて、それがジャンルの社会的な位相の変遷と関わっていたことを示した点にある。また、その対象作家として、木々高太郎という戦前・戦後を通じて活躍した作家に加え、従来主要な研究対象とされてこなかった仁木悦子、有馬頼義らを取り上げ、その実践がジャンルの位相の変遷において重要な役割を果たしたことを示したことも意義といえる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the Japanese detective fiction genre from the 1920s to the 1950s as a dynamic form composed of diverse discourses and examines their correlation. Specifically, we conducted a survey of media discourse, particularly newspapers and magazines, to clarify the aspects of "tantei shosetsu" in the 1920s and 1930s and the process by which they were replaced by the term "suiiri shosetsu" in the 1950s. The novels and critical practices of Takataro Kigi, Etsuko Niki, and Yorichika Arima, who played an important role in this transition, are also examined. As a result, it became clear that the transition of the above designations correlated with the transition of the image of the genre from an "unhealthy" one associated with "eroticism and grotesqueness" to a "healthy" one.

研究分野：日本文学

キーワード：探偵小説 推理小説 大衆文化 ジャンル論 メディア論 木々高太郎 仁木悦子 有馬頼義

1. 研究開始当初の背景

本研究は、1920年代から1950年代における日本の探偵小説ジャンルを、個別の小説・批評実践とそれらを取り巻く複合的なメディア言説から構成される動態として捉え、その相関性を考究するものである。1920年代にジャンルとして確立する探偵小説は、本格的形式を有したもののだけでなく、幻想、怪奇、SF、冒険、捕物帳などの多様な要素を持つ小説群を包含していた。それゆえに、同時期の「探偵小説」というジャンル記号には、新興文学としての文学的・芸術的価値が見出される一方、現実の猟奇犯罪や「エロ・グロ」と結びついた負性が付与されており、第二次大戦後の1950年代には「推理小説」へと代替されていくことになるのである。

こうした戦前・戦後の日本の探偵小説の総体に関する研究にはすでに多くの蓄積がある。例えば、中島河太郎『日本推理小説史』(東京創元社、1993-1996年)、押野武志編『日本探偵小説を知る』(2018年)などのジャンルの通史的研究、あるいは浜田雄介「「分類」を指向するジャンル 大衆社会と「文学」」(『國語と國文学』、2003年11月)、竹内瑞穂「探偵小説批評の欲望

甲賀三郎と本格/変格論争」(『愛知淑徳大学国語国文学』、2013年3月)などの個別作家の探偵小説批評を中心的な対象としてジャンルの言説配置を整理したもの、さらには戦後期における探偵小説の展開を論じたものとして谷口基『戦前戦後異端文学論』(新典社、2010年)などが挙げられる。これらの研究はいずれも個別の作家・作品を中心として、ジャンルの多様な試みや同時期の文学領域における布置・意義を考察した優れた研究だが、そこでは例えば同時期の犯罪報道等を含めたメディアにおける「探偵小説」という記号の使用状況などは考慮されていない。しかし、ジャンルの社会的な布置を包括的に捉えるためには、こうした戦前から戦後にかけての文壇内の個別の小説・批評実践だけでなく、その生成動因として作用したと考えられる広範なメディアにおける「探偵小説」という記号実践の様相と、それが1950年代に「推理小説」という呼称へと代替され歴史化されていく経過についての検討が必要となると考えられる。

2. 研究の目的

上記のような問題意識から、本研究では、戦前期において指示対象が曖昧であったがゆえに放縦に運用された「探偵小説」というジャンル記号に対するイメージの形成・流布と、それが戦後期に「推理小説」へと代替されていく過程を検討することを目的として設定した。

具体的には、戦前から戦後にかけての「探偵小説」と「推理小説」の言説布置を、個別の作家・批評家らによる小説・批評と、犯罪報道記事や広告等の活字メディア、そして特に戦後期に多く製作されることになる探偵小説を原作とした映像メディアを含めた多様な言説の調査・分析を通じて検討する。こうした作業を通じて、「探偵小説」というジャンル記号に付されたイメージを構成する複層的な言説の連関を共時的・通時的な側面から明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

上記のような目的から、本研究は、戦前から戦後にかけての「探偵小説」と「推理小説」をめぐる言説の調査・分析と、個別作家に関する資料調査・テキスト分析、という二つの方法を用いる。具体的な対象・方法は下記の通りである。

まず、戦前・戦中期における地方紙を中心とする新聞メディアを対象とした探偵小説に言及する記事の収集・整理を行う。また、戦後期の『宝石』『探偵倶楽部』『探偵作家クラブ会報』『推理小説研究』等を通覧し、同時期の「探偵小説」という語の運用の在り方とその変遷を跡付けるとともに、それが「推理小説」へと代替されていく過程を検討する。

さらに、上記の言説分析をふまえ、戦前・戦後を通じて活躍した探偵作家である木々高太郎、および、1950年代にミステリ・ジャンルへと進出し同時期の「推理小説」の大衆化に重要な役割を果たした仁木悦子、有馬頼義らの関連資料の調査とテキスト分析を行う。

こうした作業を通じて、戦前から戦後にかけての「探偵小説」から「推理小説」へとという呼称の変遷の内実を明らかにするとともに、そこに個別の作家の実践がいかに関わっていたのかを示す。

4. 研究成果

本研究を遂行するにあたり、研究期間を通じて複数回東京出張を行い、国立国会図書館・日本近代文学館・神奈川近代文学館・早稲田大学図書館などで、『宝石』『探偵倶楽部』『探偵作家クラブ会報』『推理小説研究』等の戦後期の探偵小説専門誌・会誌を中心に、敗戦後から1950年代における探偵小説関連言説の調査を実施した。そこでは、従来の研究ではあまり論じられてこなかった敗戦後の本格的探偵小説の成立からその後の社会派推理小説の隆盛へと至る過渡的な時期における言説の収集・整理を行い、「探偵小説」から「推理小説」へと呼称が推移していくブ

ロセスを跡付けるための基礎的な調査を行うことができた。

また、上記と併行して、戦前から戦後に至るジャンルの展開を考察するために、「推理小説」というジャンル名称の提唱者でもある木々高太郎の戦後期における創作・批評実践に着目し、関連資料の収集・整理とテキスト分析を行った。まず、批評活動においては、木々が1930年代後半に提唱した「探偵小説芸術論」が、1950年代に至って「人間の知恵の勝利を謳う文学」としてのテキストの社会性を重視する議論へと変遷を遂げていたことを確認した。また、創作活動では、1950年代初頭に熊本県で発生したハンセン病患者をめぐる実在の死刑冤罪事件を題材とした『熊笹にかくれて』（1960）を検討した。本作では再審請求をめぐる社会問題化される同時期の事件の在り様が描かれるとともに、フィクション形式を用いて発表時には係争中であった事件の「真実」を考察する試みが行われており、それが先述の木々の批評実践における社会性の重視と通底するものであることが明らかとなった。

さらに、それと併行して、「探偵小説」から「推理小説」への移行とジャンルの大衆化に重要な役割を果たした仁木悦子と有馬頼義の創作・批評及び映画化作品関連の資料調査を行った。仁木悦子については、ミステリ作家としての出発点となる江戸川乱歩賞受賞作『猫は知っていた』（1957）のベストセラー化をめぐる言説と、それと連動した映画化作品に関する資料を収集・整理し、仁木の「健全」な作風が戦前から連続する「エロ・グロ」と結びついた「探偵小説」とは異なる「推理小説」の認知に重要な役割を果たしていたことがわかった。

また、有馬頼義については、探偵作家クラブ賞受賞作の『四万人の目撃者』（1958）とその映画化作品をめぐる言説を中心とした資料を収集・整理するとともに、カストリ雑誌・野球雑誌等の調査を実施し、全集・単行本未収録作品を複数収集した。こうした作業は、従来主要な研究対象とされてこなかった有馬頼義の作家的営為を考察するための基礎的な調査としての意義を持つと同時に、1950年代後半以降の「推理小説」の大衆化に多大な影響を及ぼした社会派を、その中心的な作家として論じられてきた松本清張・水上勉とは異なる視座から考察することにも寄与するものといえる。

以上のように、本研究では、戦前・戦後を通じて展開した「探偵小説」から「推理小説」へと至るジャンルの在り様を考察する新たな知見を含む成果を挙げることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井川理、乾英治郎、柿原和宏、杉本裕樹、鈴木優作、樽本真応、浜田雄介、平山雄一、穆ゲンコウ、湯浅篤志、横井司	4. 巻 22
2. 論文標題 橘外男作品紹介	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『新青年』趣味	6. 最初と最後の頁 86-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井川理、乾英治郎、大鷹涼子、杉本裕樹、浜田雄介、平山雄一、穆ゲンコウ、横井司	4. 巻 23
2. 論文標題 くお う あでいす 批評・紹介・感想	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『新青年』趣味	6. 最初と最後の頁 308-322
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------